

幼稚園 異年齢の友達と遊ぶ 「こじかの日」

附属幼稚園 副園長

上野由利子



週に一度の「こじかの日」

附属幼稚園では、毎週月曜日に異年齢の友達と遊ぶ「こじかの日」を実施しています。園舎の構造上、学年の異なる子ども同士が日常的には関わりにくいこともあり、週に一度、意図的に年齢の違う二人が一緒に過ごす時間を設けています。昨今では、地域でさまざまな年齢の子どもたちが集い群れ遊ぶ姿は、めったに見られなくなりました。そのため、幼稚園の中で年齢が違う関係から生じる思いやりや、それを受ける体験は貴重であると考えています。時には、思うように動いてくれない年少児の対応に悩む年長児や、思い



シロツメクサの指輪を作ってあげるね

をうまく伝えられずにもどかしい気持ちを持つ年少児の姿も見られます。楽しい経験ばかりでなく、このようなうまくいかない体験も、教師に支えられることで、豊かな成長につながります。

ふれあい遊びで仲良し

「こじかの日」は、一緒に遊ぶ友達を見つけたところから始まります。初めて遊ぶ友達もいるので、誘った後に互いの名前を教え合い、歌に合わせて一緒に動いたり、くすぐり合ったりするふれあい遊びを行います。互いに触れ合うことで、緊張した気持ちを和らげ、親しみを持てるようになると考えています。

二人で分けるおやつ時間

おやつも二人で分けて食べるようになっており、二人で一枚の大きなおせんべいや、奇数枚入ったビスケットなど、いつもとは違う「分けるおやつ」を用意します。年長児が主導権を持つことが多いのですが、きつちり同じように分けたり、多い方を小さい友達に譲ったりと、分け方にも工夫が感じられます。

思いやりの連鎖

遊びの時間は二人で相談して進めますが、年長児が小さい友達をブランコに乗せて押してあげたり、草花の飾りを作ってあげたり、あちこちで微笑ましい関わりが見られます。年中少児にとって、やさしくしてもらった体験は心地よく受け止められ、

小学校 地域や家庭とつながる 学校給食

附属小学校 栄養教諭

阪口 美香



本校は、自校献立による単独校方式の給食を週五行っています。児童・教職員約680人の給食を、栄養教諭一名と調理員五名で作っています。給食室からいいにおいがすると、子どもたちから「今日の給食何?」「早く食べたい!」とうれしい声が聞こえます。「安全で豊かな給食を食べることで、子どもたちの心と体を健やかに育てていく」という目標のもとに、給食も教育活動の一つとして取り組んでいます。

食の安全性が脅かされている今日、

顔の見える生産者

食の安全性が脅かされている今日、

がユネスコ学校に参加するとともに、ESD（持続可能な開発のための教育）に取り組む始めて3年になり、今の3年生が「ESD3年生」となります。ESDは単なる「坐学」で終わるものではなく、学んだことを「実践する学」なのです。たとえ中学生の考えであっても、思いを形にしていける社会的な提案にまで高めていきたいと、今回の「佐保川プロジェクト」に取り組むことになりました。

ところで、「持続可能性」とは具体的に何なのでしょう?よく話題になるのは、「環境」や「資源・エネルギー」問題であったり、「平和」の問題であったりします。しかし、これらの学習は、ややもすると通り一辺倒で終わってしまうことがよくあります。

学校の学びから 地域を創造するESDへ

この3年間の学校行事におけるESDの取り組みでは、「地域」または「地域共同体」に残された「もの」や、残していこうと取り組まれていく「こと」に深く学んでいく視点が継続されました。そこで出会ったのが、「宮川流域ルネサンス協議会」のエコミューシアムの取り組みです。昨年度から、協議会の方の協力を得て、地元NPOの方たちの「地域の持続的発展」を願う活動に参加体験させてもらっています。

このルネサンスの活動を支えているのが「流域案内人」です。「地域の暮らしを伝えます」「地域の将来を提言します」「地域の自然・伝統・文化を守ります」「地域の自然と人のかか

翌年、逆の立場になった時に、小さい友達への思いやりの行動として受け継がれていくのです。そして、一年間の「こじかの日」の活動は、仲良しになった友達と共に祝う卒園式で終わることになります。

学校給食も例外ではありません。成長期の子どものために食べる給食だからこそ、「顔の見える生産者」を大切に、おいしく安全な食材の追求をしています。「顔が見える」ということは、どこで誰が作ったかが明らかであり、安心して使用できるといいうことです。

野菜や果物は、奈良県や奈良市産といった、地元の新鮮でおいしいものを積極的に取り入れ、時には給食時間の放送で、生産者の思いを子どもたちに伝えることもしています。生産者の顔が見えると、子どもたちも食材を身近に感じ、感謝の気持ちを持つだけでなく、苦手なものでも食べようとする意欲が見られるようになります。野菜や果物の他にも、

わりを解説します」「地域の産業を解説します」というのが活動のモットーです。私たちの学校教育が、真に「ひとが幸せに生きることとは何か?」について、果たして子どもたちに伝えてきたのか、ESDに取り組むことは、私たちの「教育活動」そのものを問い返す形となりました。

この「佐保川プロジェクト」では、奈良市の里山と里川のつながりを住民はどのように捉え、その環境保全のあり方についてどのように取り組まれているのかを、宮川ルネサンス事業の先進事例に学びながら、自分たちの地元の佐保川で何ができるかを考えてみます。取り組み計画として、左記の内容を考えています。

- ① 佐保川源流探検
- ② 佐保川一斉チェック(水質検査、水辺環境・景観の調査、水辺の遊びの聞き取り調査)
- ③ 佐保川水質保全装置の実験
- ④ 世界遺産を育んだ佐保川(大和川水系)再生への私たちの提言をまとめる
- ⑤ 佐保川キャラクター「さほりん」製作



佐保川一斉チェック

牛乳や牛肉、豚肉も県内産のもの、醤油や豆腐も市内の業者から手作りのものを納入しています。給食は食べるだけではなく、農作物に関わる人とのつながりを、子どもたちに学んでもらう場でもあると考えています。そして、食べることの大切さと何をどう食べるのかを、給食を通して学んで欲しいと思います。また、給食の食材から教科との関連



産地見学(市内のいちご農家)の様子

家庭との連携

学校保健委員会では、給食の納入業者との話し合いや産地見学、食に関する講演会などを行い、保護者と共に食について学んでいます。産地見学では、給食で使用している市内のいちご農家に行き、直接生産者から話を聞く機会を持っています。牛乳を大手のメーカーから市内の植村牧場に替える提案をした際は、広く保護者に見学を呼びかけ、保護者の意見も聞きながら実現に至りました。また、学校保健委員会から提案された献立を、給食に取り入れることもあります。その他にも、給食試食会などで食に関する意識を高め、理解や協力を得ています。

これからも、地域や家庭と連携を行いながら、子どもたちの食について考えていきたいと思っています。

中学校 ESD佐保川 プロジェクトはじまる

附属中学校第3学年主任 ESD推進室

竹村 景生



思いを形に

3年間の附属中学校での学びの積み上げから、自らが関心を持つテーマを定め、探求的に一つの論文として仕上げるとともに、その成果をみんな

分かち合うプレゼンテーションまで、私たちの「卒業研究」の取り組みも今年で5年目を迎えます。

今年は新たな試みとして、この卒業研究に「佐保川プロジェクト」チームを募集することにしました。本校